

古文学習のアポリアの向こう側

ー 『平家物語』テキストと学習者との出会いー

村山 太郎

学習者は、古典テキストを読解する際に自分の感じ方やいかにも古文らしい展開などを外から持ち込んで読もうとする。理解するのが難しい現実と直面したときに私たちのしてしまう自然な理解の仕方ではあるが、その時に無かったことにされる古典テキストの側の叙述の中には、大切なものももちろんある。本稿は、この見落とされがちな大切なものと学習者とをいかに授業空間で取り結んでいくかを課題とし応答しようとするものである。

1. はじめに

古典テキストも含めて、理解するのに難しい現実と出会ったときの私たちの心の内では、これはどういうことなのだろうかという問いが立ち上がるとともに、以下の作業がきつと観察されるはずだ。

われわれがなにかの問題に取り組み、それを注意深く考察しはじめるやいなや、われわれの内言(ときに、ひとりきりで、声に出されたものであることば)は、問い・答え・主張・その後の否定という形態をとる。つまりは、われわれのことばは、大小さまざまの個々の応答に分かれており、対話的形態をとっているのである。／この対話的形態がもっとも明らかにあらわれるのは、われわれがなんらかの決断をしなければならないときである。われわれは揺れ動く。どうふるまうのが最適なかわからない。われわれは自分自身と議論し、なんらかの決定の正当性を自分にたいして説得しはじめる。意識はあたかも、互いに矛盾する二つの独立した声に分かれているかのようである。／そして、つねに、これらの声のうち的一方は、われわれの意志や意識とは独立して、われわれが所属する階級の見解や意見、評価と融合する。第二の声はつねに、われわれの階級のもっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声となるのだ。(ミハイル・バフチン 小林潔訳「芸術の言葉の文体論 第Ⅱ章 発話の構成」『バフチン言語論入門』、せりか書房(2002/8))

「所属の階級」で流通する「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」と私の決定との校合作業。理解するのに難しい現実と出会ったときに私たちの「内言」(＝心の内)に観察される作業とはこのこと

である。

大切なのは、この校合作業で私の決定に力を与えるのは、「所属の階級」で流通する「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」であるという点である。マルクス主義に配慮しながら言葉を選ぶバフチンは「所属の階級」と表現しているが、これは時代や文化、社会という言葉に置き換えた方が我々には通じやすいところだろう。また、「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」は同時代に流通する類型や典型、枠組といっても差し支えないだろう。そのように、少し我々の側にバフチンを引きつけて読めば、如上の用例は我々の生きる今の時点のここに流通する類型や典型、枠組を参照することで、我々は自身の決定の妥当性を確認している。そうしたことを教えてくれるのである。

2. テキストの側にある現実

以上のように私たちの認識一般を粗描しておこう。これはあまりに図式的で雑駁な議論と受け取る向きもあるだろうが、かかる概観をまず述べたのは古典テキストと私たちが出会ったときに散見される出来事をよく説明してくれると思ったからである。例えば、その一例として古典テキストを読み引用することで作られた現代の作品を挙げてみよう。その作品とは、『平家物語』「木曾最期」に取材し・メイクしたNHK大河ドラマ『義経』(注1)のことで、それは本作品が木曾義仲の最期を描く場面に見える。

周知の通り、上記の大河ドラマが取材する『平家物語』での木曾義仲は、「日本国に二人の將軍と言はればや」との大望を抱き源頼朝挙兵に呼応して信濃の国から平家追討の軍を進め(「廻文」)、連戦連勝を重ね(「横田河原合戦」)北陸道を通って都に入ることで平家を追い落とし、「朝日將軍」の職を拝命するに至る。

だが、その最期はあっけないもので、平家追討戦の敗北と義仲軍の都での暴挙が朝廷及び頼朝との関係を悪化させ、朝廷の依頼によって頼朝が派遣した軍勢によって討ち取られてしまう。そうした人物として描かれている。ちなみに『平家物語』本文での義仲の最期は、「幼少竹馬の昔より」慣れ親しんだ乳母子「今井四郎兼平」の「行方のおぼつかなさ」に振り返った挙げ句、武士としての名誉を守る自害も叶わず討ち取られている（「木曾最期」）。こうした武士らしい義仲の、武士らしからぬ最期の姿には、『平家物語』テキストの人間に対する複雑な見方があるのだろうが、問題は、大河ドラマでは心象の朝日を見つつ満足そうに死んでいく義仲の最期が語られていることである（【画1】参照）。

【画1】NHK大河ドラマ『義経』義仲の最期



『平家物語』「義仲最期」に取材した大河ドラマは古典テキストでは武士らしからぬ義仲の最期を、両目をしっかりと開けて朝日を見つつ笑みすら浮かべながら討ち死にするものに描き変えるのである。冒頭に示したバフチンの言葉に拠れば、こうした再表象には大河ドラマの制作者が『平家物語』「義仲最期」と出会ってあまりにもあっけない最期の姿が理解できず、そこに充実感のようなものを読み込み描きたいと決定しその決定と現代社会に流通するある種の典型とを校合する。そうした過程があったことを穿ってみてもよいだろう。つまり、義仲は自分の人生に満足しつつ死んだという決定（解釈）と、人生で何になれたのかを重視する現代社会の考え方（注2）とを重ね合わせ、「朝日の将軍」にまで上り詰め「日本国に二人の将軍と言はればや」との大望を実現した時点で義仲の人生は充実したものであったと形にしたのである。これこそが本作品にとって古典テキストとの出会いの中で生じた

出来事である。確かに、我々の生きる時代において人生の価値を計る物差しとして「結局何になれたのか、何を手に入れたのか」（鷲田清一）は共有しているそれとしてある。だから、本作品は生涯をかけて将軍になった人物として義仲の人生を意義付け書き換えたという点では『平家物語』「義仲最期」を近代的作品に上手にリ・メイクしたものとはいえよう。

NHK大河ドラマ『義経』は高度な言語化能力を有するプロが自らの生きる時代や社会、文化に流通する「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」をならみ主体化しつつ具体化されたものである。ここまでのリ・メイクは無理としても、具体化の過程で起こっている出来事は誰にもおそらく起こりうることだろう。むろん、学習者にもそれは起こることとしてある。古典テキストと私たちが出会ったときに散見される出来事とはこのような出来事を指している。

今を生きる我々にとって、古典テキストはやはり遠い。それは理解するのが難しい現実だろうし、授業という枠組を外せば敢えて直面することは多くのものがおそらくは避ける現実であろう。だから、状況がその現実を呑み込むように迫ってくれば、なるほど自分に馴染みのある「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」の側から形にならない現実を整えて歪めてしまうのが手っ取り早いやり方であるし、私たちの認識の仕組みの性に適ったものではある。だが、古典テキストという現実の中には、自分を取り巻く時代や社会、文化、そしてそこに流通する「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」と格闘しながら生み出されたものもある。『平家物語』テキストの「義仲最期」の場合などもそうした現実の一つである。そこでは、誰もが期待する武士らしい最期と、死ぬときには兄弟のような兼平にすぎりつきたいという自分の思いとの間で宙づりになった挙げ句に討ち取られる義仲の姿が語られている。死を前にした人間には、型通りの死も、恥も外聞もかなぐり捨てた我が儘な死も選べないことが明確に語られているのである。それを、〈武士〉らしさという同時代の「理想的な代表の声」の抑圧を受けながら、『平家物語』テキストは何とか描出しているのである。そうした現実の側の事情を、しかも、自分たちの死生観を揺さぶるような問題と無縁ではない問題を、自分たちにとって分かりやすい形として理解することは、きれいに捨棄してしまう。こうした古典テキスト（現実）理解を超えたところに、古典テキストとの出会いを確保したい。そして、その出会いを通して、古典テキストという現実が彼らの生きる時代や文化、社会に流通する「理想的な代表の声」といかに関わっているのか。それをこそ、学習者が批評

することで、学習者自らの「理想的な代表の声」との関わりを見つめ直し種々の声に取り巻かれつつ今を生きる他者と新たな「理想的な代表の声」を創造しようとする。そうした公共性に向けた営みへの架橋として〈古文学習〉を創造すること。それこそが本稿のねらいである。以下に報告する古典の授業はそうした稿者の意図に即して構想・実施したものである。

3. 単元「古典テキストとの対話」

本稿の問題意識は以上の通り。この問題意識に即して『平家物語』での平清盛の語られ方を単元のテーマに設定し、以下のように中学三年生対象の単元を構想した（実施2012年11月）。

3. 単元計画（全26時）

- ①『平家物語』での平清盛の語られ方
 - 1 平忠盛（『平家物語』巻第一「祇園精舎」「殿上閣討」）（2時間）
 - 2 源頼朝（『平家物語』巻第八「征夷將軍院宣」）（2時間）
 - 3 清盛の栄華1（『平家物語』巻第一「鱸」「禿髮」）（2時間）
 - 4 異なる清盛（『十訓抄』巻中 七ノ二十七）（1時間）
 - 5 清盛の栄華2（『平家物語』巻第一「殿下乗合」）（2時間）
 - 6 「殿下乗合」の事実？（九条兼実『玉葉』巻第五・嘉応二年七月三日条他）（1時間）
 - 7 平家への不満（『平家物語』巻第二「西光被斬」）（2時間）
 - 8 重盛の最期（『平家物語』巻第三「颯」「医師問答」）（2時間）
 - 9 重盛没後の清盛1（『平家物語』巻第三「法皇被流」）（2時間）
 - 10 重盛没後の清盛2（『平家物語』巻第五「奈良炎上」）（2時間）
 - 11 清盛の最期（『平家物語』巻第六「入道死去」）（2時間）
- ②乱暴者の語られ方
 - 1 殷の紂王（劉向『列女伝』巻七「孽嬖伝」、二「殷紂姐己」）（2時間）
 - 2 董卓（陳寿『三国志』魏書六「董二袁劉伝」）（2時間）
- ③『平家物語』の特徴を考える
 - 1 九条兼実『玉葉』（治承三年十一月十五日条）

の記事を踏まえて、『平家物語』での清盛のクーデターの語られ方を想像し、『平家物語』巻第三「法印問答」を読む。（1時間）

- 2 『平家物語』巻第九「敦盛最期」を読み『平家物語』の他者（武士）理解を批評する。（1時間）

※指導案より一部抜粋。

4. 単元構想の留意点

まず、単元構想上、留意した点は古典テキストという現実がどういった「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」を参照しつつ平清盛を語ろうとしているのか。それをいかに学習者に気付かせていくのかといった点である。というのも、そうした働きかけを欠いたまま学習者に『平家物語』の語る平清盛と出会わせると、これこそ清盛のありのままの実像と学習者が受け取ってしまうからである。その受け取り方が露わな例を以下に挙げよう。用例は「3. 単元計画」の③で実際に学習者が書いたものである。

本文において、ほとんどの出来事に光の部分も影の部分も現れていると思うが、典型的な光の部分には、清盛の異常なほどの昇進だろう。きっと平治の乱での清盛の活躍が非常に良かったのだろう。正三位になるなどというのは武士では当時不可能に近いものだったが、それにも止まらず、中納言・大納言と次々に昇進を続け、最後には左右大臣にならずして太政大臣になった。まさに異常なスピード出世。平家の栄華を極めたと言えるだろう。／だが、光があれば影があるものである。大勢の見張りを京都中に張り巡らせ、平家の悪口を言った者をことごとく縛り上げ処罰する。悪口などこでもささやかれているものなのであるが、清盛は自分の絶対的な権力を世に示したかった。そのせいで、むしろ反感を買ったことだろう。これが平氏の栄華を極めた時代の影の部分である。（中三男子）

清盛が天皇の味方をし、勲功があり、位がどんどん上がっていった。一族も大いに繁栄する。これというのも、熊野権現の御利生で大きな鱸を食べたおかげである。これが本文の前半であり、光の部分である。しかし、繁栄するあまり、「この一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」のように思い上がり、平家一門に一言でも文句を言うと、

捕らわれ、全ての財産を没収され……という有様である。これが影の部分だ。／このように光と影を同時に書き手が描くのは、書き手が権力を持つと横暴になるような人は、必ず最後思い知らされ、滅亡していくのだということを言いたいためではないかと思う。忠盛の話の最初に出てきた文章にも、そのようなことが書いてあった。書き手は、この物語を世の教訓にしたかったのではないだろうか。(中三女子)

以上のように、清盛の栄華を語る「3. 単元計画」の①の「3 清盛の栄華1 (『平家物語』巻第一「鱸」(禿髪))」の本文と出会って「清盛は自分の絶対的な権力を世に示したかった。そのせいで、むしろ反感を買ったことだろう」、「権力を持つと横暴になるような人は、必ず最後思い知らされ、滅亡していくのだ」ということを言いたいためではないか」と学習者は類推している。この類推は本文を踏まえると決して間違いではないのだが、『平家物語』の側の事情からいえば、こうした清盛像は清盛という人間を描き出そうとする自分の決定に形を与えた「理想的な代表の声」をなぞったものでしかない。というのも、『平家物語』に先行する物語には、権力者が権威や私情を以て臣民を抑圧することで悲惨な最期を遂げるものは幾つも見られるからである。だから、それを書き手のメッセージであるとか清盛の実像であるといったふうに理解することは、特定の時代に見られる典型的で理想的な代表の声に取り込まれてしまったということにすぎないのである。

そこで工夫したのが、『平家物語』には語られなかった清盛の異なる姿を学習者に示すことである。その工夫が、「3. 単元計画」の①に配した「4 異なる清盛(『十訓抄』巻中 七ノ二十七)」や「6 「殿下乗合」の事実? (九条兼実『玉葉』巻第五・嘉応二年七月三日条他)」である。ここに取り上げられたテキストには、下級貴族の失敗を見て見ぬふりをすることで助けてやる清盛や、『平家物語』では清盛のひどい仕打ちとして語られている事実が別の人物(平重盛)のしたことであったことなどが語られている。こうした異なる清盛像を教材として配列することで『平家物語』の主体化する規範意識を対象化しようとしたのである。これがまず留意したことである。

次に留意したことは、『平家物語』を縛りつける清盛語りの基本方針(規範意識)が何であったのかをしっかりと学習者に示し気付かせるということである。その工夫が本単元計画の②「乱暴者の語られ方」に見える「1 殷の紂王」(劉向『列女伝』巻七「孽嬖伝」、二「殷紂妲己」)、「2 董卓」(陳寿『三国志』魏書六「董

二袁劉伝)」という教材配列である。

先述の通り、為政者として私情に任せて横暴を働き臣民を苦難に陥れる清盛の姿は広く漢字文化圏に見える〈暴君〉の類型的な語り口である。例えば、『平家物語』では平清盛が平家の批判者を取り締まるために「禿髪」を都中に放ち皆罰が恐ろしいので口を閉ざす都の様子を語る(「禿髪」)が、陳寿『三国志』においても董卓が私情で厳刑を与えるので皆が口を閉ざす洛中の様子を語っている(「法令苛酷、愛憎淫刑、更相被誣、冤死者千数。百姓嗷嗷、道路以目。」)同書「董二袁劉伝」。あるいは、平家討伐の謀議が露見した際、首謀者の一人である「西光法師」に批判されて怒りのあまりに残虐な肉刑を加える清盛も語られている(「西光被斬」)が、これも、賢臣でもあった王子比干に批判されて怒りのあまりに(妲己からの献言もあり)比干の胸を裂く『列女伝』の紂王の姿(「割心而觀之。」)同書「殷紂妲己」)に重なるだろう。その他にも重なる点は枚挙に暇がないが、こうした類型が産出される背景には、人民と国家のありようを熟知する賢臣の諫言をよく聞き自らの政を正し行かう為政者をこそ良きものと価値付ける儒経言説の存在であろう。そこでは国家の安寧(=公)という点でたとえ厳しい批判であっても人の意見を聞き自己を律する為政者が称揚され、その陰画たる〈暴君〉は私情にとらわれ国を危くする点で批判されるからである。このように、公/私という線引きを為政者に強く求める儒教の考え方がおそらくは組織化している語り口であろうが、漢字文化圏では滅亡した為政者の姿を語り意味づけるのに頻繁に見えるやり方(「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」)なのである。そうしたことを踏まえて、いわゆる〈暴君〉と呼ばれる人物の物語が似ていることに気付かせることで、清盛も含めた〈暴君〉語りの制度的な語り口という側面を学習者に対象化させるのである。

5. アポリアの向こう側

すると、学習者は類型性に気付くことはもちろんのことだが、他方で『平家物語』の清盛語り(暴君)の類型に重なりつつずれていることにも、理屈として言葉にはならない程度で、気づき声を上げ始める。類似形の中にある差異を生み出す本文の雰囲気のようなものに反応しはじめるのである。その雰囲気こそ、同時代の「もっとも典型的かつもっとも理想的な代表の声」に対して『平家物語』テキストが単に模倣するだけでなく格闘しようとした痕跡なのではあるが、ここ

ではその雰囲気気づいた学習者の声を幾つか掲げておこう。用例は、「3. 単元計画」の②のまとめとして学習者が実際に記述したものである。

清盛も都中の人たちを監視して何も言わせなかったけれど、紂と卓はいわせないための刑がひどすぎる。炮格の法や厳刑などを作っているのだから紂と卓とは人間性がない。だから清盛と紂・卓、それぞれに対して攻めてくる人も違う。清盛は完全に敵の後白河法皇などが平家を倒そうとしたけど紂・卓は自分の部下に裏切られた。部下に裏切られるほど紂・卓は暴君度が高かったのだろう。(中三男子)

紂・卓、清盛は暴君と言われるだけあって、かなりの独裁だったと思う。私は、清盛よりも紂・卓の方が暴君度は高いかなと思った。中国の二人は、人をモノのように扱い、殺すことを楽しんでいるように見えた。やる事が全部残酷。でも、笑っていて何か同じ人間じゃないみたいだなと思った。清盛も独裁だったけど殺すことを楽しんでいただけではなかったので、まだ人間味があるかなと思った。(中三女子)

挙例二例とも、殷の紂王、秦の董卓、平清盛という三者の〈暴君〉の重なりを記述してはいるが、重なりの中にある清盛の違和についても感じている何とか記そうとしている。それが殷の紂王や秦の董卓は「人間性がない」や「同じ人間じゃないみたい」という言葉だろう。つまり、清盛は〈暴君〉ではあったが「人間味」を感じさせた、そう感じさせるような雰囲気が『平家物語』にはあったということに二例とも気づきはじめているのである。

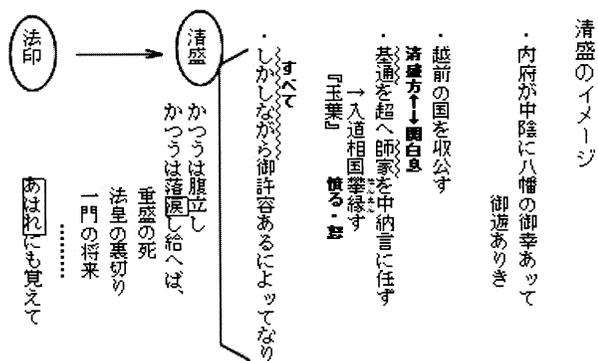
この時点で、一個の人間が、時代や社会、文化の強い考え方と格闘しようとする姿を、学習者は視野におさめはじめたといつてよいだろう。無論、単元はここで終わりではなく、その格闘の実相を学習者が批評しなければならない。そこで、次のステージに向けて留意した工夫が、清盛の「人間らしさ」を『平家物語』がどうやって担保していたのかや、なぜそう描くのかといった問いを、具体的な本文を踏まえて考えられるようにすることである。こうした問いを考え答えていくことが「理想的な代表の声」との格闘の痕跡を確認することになるからである。その材料として配したのが「3. 単元計画」の③の教材(『平家物語』巻第三「法印問答」、『平家物語』巻第九「敦盛最期」)である。

これらの教材で語られていることは人の生死にすら非情の〈武士〉が涙を流す姿である。「法印問答」(『平家物語』巻第三)では亡き嫡男重盛に対する涙を清盛が流し、「敦盛最期」(『平家物語』巻第九)では討つべき敵将に我が子を重ねて直実が泣く。この〈武士〉の目にも涙という叙述が清盛に人間味を感じるよう書き手が担保したものの一つだったのだろう。そして、こうした武士の姿を描出することで、非情であらねばならない〈武士〉という生き方をどれほど強固に主体化していても、人間の情感の揺れ動きは観念では制御できないものとしてある。おそらくは、そうしたことを読者に呼び掛けようとしたのだろう。これが先に示した問いの答え、といえは答えになる。そうした答えに気づくように、例えば、「法印問答」を取り扱った授業では以下のような授業展開を仕掛けてみた。次に示すのは、本単元計画③「『平家物語』の特徴を考える」の「1九条兼実『玉葉』(治承三年十一月十五日条)の記事を踏まえて、『平家物語』での清盛のクーデターの語られ方を想像し、『平家物語』巻第三「法印問答」を読む。」での授業展開と板書計画(指導案一部抜粋)である。

【授業展開】

時間(分)	学習活動	指導上の留意点
5	導入 ・前時までの学習内容をふりかえり、本時の学習内容を確認する。	・紂王、董卓と清盛の比較を通して清盛の特徴を理解する。
	展開Ⅰ ・『玉葉』の記事を参考にし、『平家物語』本話の叙述内容を予想する。	・『玉葉』の記事を踏まえて清盛の怒り方を想像する。
15	・『平家物語』本話の叙述を読む。	・口語訳プリントを用いる。 ・筆読を聞き、ペアで音読する。 ・『平家物語』と『玉葉』との違いを観点に即して考える。
35	展開Ⅱ ・『平家物語』本話で描出されている清盛の姿を捉える。	・『平家物語』本話での清盛の「落涙」の中身を考える。
45	終結 ・本時のまとめと次時の予告	

【板書計画】



6. おわりに

こうした授業を経て、問題は、学習者がテキストの叙述を踏まえつつその呼び掛けを相手取って、いかに吟味・批評するのかという点だろう。それをよく伝えてくれる学習者の記述を掲げておこう。その記述は、非情に生きる〈武士〉への『平家物語』テキストの理解の仕方を批評せよというお題に答えて書いたものである。

私は、他の作品みたいに固定化された他者（武士）理解よりも『平家物語』の武士という立場からだけでなく、「泣く泣く」とか「落涙」とかも書いた方が良く思う。／武士だって武士であるけど、一人の人間だし、そういう人たちを武士だからこうだ！こうでなくてはならない！って書くのは一種の差別みたいだし、私はなんだかそういうことをするのは嫌だし、そういうことをすると、お話がお話になってしまってリアリティが無くなると思う。（中三女子）

挙例の記述は、吟味・批評というには『平家物語』にあまりにも賛同しているものであるし、上手な文章でも決してない。だが、『平家物語』の武士語りを通して、清盛を〈暴君〉や〈武士〉のイメージに閉じ込め語ることの問題点（「一種の差別みたいだ」）に気づき、型どおりのイメージを供給する物語や典型的な物語を指して「お話がお話になってしまってリアリティが無くなる」とその危険性にも気づいている。それこそが大切だろう。素裸の現実をなるべくそのままの形で受け取り語ろうとする姿勢の大切さに気付いたということだからだ。その姿勢は〈理想的な代表の声〉に

は形にできない現実や掬えない他者を見逃さず、そうした他者や現実に形を与える新たな〈理想的な代表の声〉（公共圏）を創出しようとするに繋がる姿勢でもある。その姿勢の大切さと獲得することの難しさとは冒頭に示した大河ドラマが古典テキストという他者にしたことを引き合いに出せば理解できよう。その意味で、本稿が提案する〈古文学習〉の一つの到達点を、挙例の記述はよく示している。

ただし、挙例にはこうも問うてみたい。それは、「リアリティ」のある「お話」とはいかなる「お話」で、学習者自身が日常で取り交わす「お話」に「リアリティ」を担保するとはいかに「お話」することをいうのか、と。ありうべき公共性を具体化しようとする思考とは、これらの問いに答えようとするところから始まるのだろう。むろん、これらの問いの答えを求めることは行論の単元内容からいけば欲張った要求ではある。だから、この問いは先を急いでいるという点で少し意地の悪い質問でもあるのだが、とまれ、こうした〈先〉を見据えつつ学習者の学びの深化拡充を目指し、学習者がありうべき公共性を考え具体化の方途を獲得し続けていけるよう、稿者も種々のテキストの「対話」（格闘・関わり方）の実相を眺めつつ試行錯誤と探求考察とをし続けたい。

（注）

1 NHK大河ドラマ『義経』……【原作】宮尾登美子『宮尾本平家物語』『義経』、【脚本】金子成人、【出演】滝沢秀明（源義経）・松平健（武蔵坊弁慶）・小澤征悦（木曾義仲）・小池栄子（巴）・古本新之輔（今井兼平）他、【制作・著作】NHK、【放映】2005/1/9～2005/12/11）である。ここで取り上げた場面は第二十五回放送「義仲最期」。

2 人生で何になれたのかを重視する現代社会の考え方……大庭 健・鷺田清一 編著『所有のエチカ』（ナカニシヤ出版、2000年10月10日）所載、鷺田 清一「所有と固有——propriete という概念をめぐる」等、鷺田清一の著作に詳しい。

【参考・引用文献】

『平家物語』、『十訓抄』…小学館『新編日本古典文学全集』。従って授業教材や本稿で扱う『平家物語』は「覚一本」である。諸本と「覚一本」該当本文との比較・校合はしていない。
『列女伝』…明治書院『新編漢文選』
『玉葉』…国書刊行会『玉葉』
『三国志』…中華書局本『三国志』を底本にし、筑摩書房刊『正史 三国志』を参考にした。